

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより



第16号／平成21年6月18日発行

- | | |
|--------------------------|---|
| 伝説の『漫画少年』誌と名編集者・加藤謙一の軌跡 | 2 |
| 20世紀前半、文京の園芸文化—菊栽培と温室文化— | 4 |
| 収蔵品展余話「浪曲師テーブルかけ」をめぐって | 6 |
| 平成20年度のあゆみ | 7 |
| 平成21年度の催し | 8 |

伝説の『漫画少年』誌と 名編集者・加藤謙一の軌跡

「タノシイ漫画」は「イケナイ漫画」

「テレビや漫画ばかり見ていないで、勉強しなさい。」

1960～80年代、漫画やアニメーション、娯楽番組とは、こどもの健全な発育に害をもたらすもの、悪いものの代名詞でした。

「ドリフターズ」に「ハレンチ学園」、「こまわり君」に「トイレット博士」。当時のPTAなどから“有害”のお墨付きをもらった番組や作品は枚挙に暇がありません。では、大人はどうして漫画やテレビを目の敵にしたのでしょうか。暴力的な行為は喜ばしくない。性的描写がいかかわしい。理由は、数多くあることでしょう。しかし、いつの時代にあっても、魅力にあふれたものや面白いものが、すべて容認されていた訳ではありません。そして、時代が変われば価値観や評価が変わるのも良くあることです。例えばそれは、現在は伝統芸能として確固たる位置を占めている歌舞伎が、江戸時代当時、“悪所”などと呼ばれていたことが端的に示しています。

青年よ 大志を抱け

お話は、まだまだ物資の乏しかった戦後間もない昭和22年(1947)にまで遡ります。

「まんがは、子供の心を明るくする。子供の心を豊かにする。」という信念のもと、個人経営の出版社を立ち上げ、漫画雑誌を刊行した人物がいます。

その人の名は、加藤謙一。

青森県弘前に生まれた加藤は、苦学の末に、地元の尋常小学校の教員となり、担任する子ども達のために手作りの学級新聞を作製します。

学級新聞の編集に携わる内に加藤は、感受性の豊かな子ども達の成長期においては、活字・印刷文化が非常に有益であることを確信するに至り、次第に、担任学級の子供達以外にも、こうしたことが活かせないかということを考え、悩める日々を送ります。

一大決心の末、教員の職を辞し上京した加藤は、わずかな伝手を頼りとして、本郷区千駄木坂下町(現、文京区千駄木3丁目)に所在していた当時の大日本雄弁会、すなわち、文京区音羽2丁目に移転した現在の講談社に大志を抱いて入社を果たします。

しかし、旧制中学校しか出ていない加藤に与えられたのは、編集や原稿執筆とは程遠い、雑用ばかりでした。

そんな日々にあった加藤の書いた企画書を一読して、その才能を見抜き、雑用係から一挙に編集長にまで抜擢したのは、ほかならぬ大日本雄弁会の設立者であった、野間清治だったのでした。

少年倶楽部の頃

『少年倶楽部』の編集長となった加藤は、『日本少年』など、同業他社の少年向け雑誌に比べ低迷していた同誌を、発行部数70万部を誇る、日本一の少年雑誌にすることに成功しました。それを可能ならしめた要因としては、以下の三つの理由が挙げられています。

加藤は、成人層向け雑誌にしか執筆していなかった、人気作家達の少年誌への寄稿を実現してゆきます。

同郷の先輩でもあった佐藤紅緑を口説き落とし、名作「あゝ玉杯に花うけて」の掲載に成功したことに代表されるおと、大佛次郎や吉川英治なども、続々と少年倶楽部の常連執筆者となっていったのです。

加藤はまた、従来の少年雑誌の定番であった、小説や詩の掲載にとどまらず、附録を充実させていきました。現代と比べて娯楽の少なかった当時は、本格的な紙模型などは、少年達から熱狂的に支持されたのです。

そして、雑誌の出版で画期をもたらしたともいわれるのが、読み物を中心とした誌面づくりに加えて、「漫画」を積極的に掲載したこととされています。

田河水泡は、元々は創作落語の作家として、講談社の雑誌に滑稽話などを寄稿していました。加藤は、美術学校の卒業生でもあった田河の作画能力の高さを見抜き、田河に動物を擬人化した漫画を作ることを提案しました。“のらくろ”や“蛸の八ちゃん”、“凸凹黒べえ”などの誕生には、こうした逸話があったのです。

娯楽色の強い『少年倶楽部』を編集する一方で、加藤は弘前での教員時代の知識や経験から、子どもの教養や知育を重視した出版物にも、力を注いでゆきます。それは『講談社の絵本』シリーズ、そして『幼年倶楽部』の刊行、という形で結実していったのです。※1



『少年倶楽部時代』(当館蔵)



『講談社の絵本』(当館蔵)

『漫画少年』の創刊

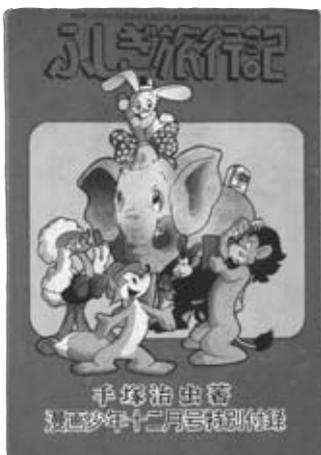
第二次大戦の敗戦により、加藤は講談社からの退社を余儀なくされます。しかしながら、加藤には、雑誌編集以外の仕事に就くことなど考えられませんでした。そしてまた子どもの発育には活字・出版文化が不可欠であることを信じて止まなかったのです。

加藤は、昭和22年に学童社を設立し、『漫画少年』誌を刊行します。とはいえ、公職追放ゆえの活動の制約、個人経営による資金繰りなどに苦慮する日々が続いたといえます。時には、講談社時代の伝手で著名な作家からの寄稿を受けられることはできたとはいえ、大手出版社発行の雑誌には、抗する術がなかったのです。

そこで苦肉の策として取られたのが、原稿料の安価な新人作家の積極的な登用、という手法でした。

神田淡路町（現、千代田区）での創業間もなく本郷区弓町（現、文京区本郷1丁目）へ移転、更に昭和30年に小石川（現、文京区後楽1丁目）で倒産するまで僅か8年間。『漫画少年』誌上で、プロの漫画家としての本格的デビューを果たした人々を列記すれば、手塚治虫を始め、寺田ヒロオ、石ノ森章太郎、藤子不二雄、松本零士、長谷川町子、つのだじろう、永尾竹丸、山根赤鬼・青鬼兄弟、高井研一郎、エトセトラ、えとせとら。

まさしく、綺羅、星のごとくと言えるでしょう。また、漫画家にこそならなかったものの、『漫画少年』の読者投稿欄の常連には、眉村卓、篠山紀信、横尾忠則など、後に異業種で第一人者となった人も少なくないのです。※2



『漫画少年』附録・手塚治虫『ふしぎ旅行記』（当館蔵）

©手塚プロダクション

新人漫画家の梁山泊・トキワ荘

豊島区椎名町5-2253番地（現、南長崎3-16-3）。かつて、ここは漫画家を目指す若者達の聖地でした。

木造2階建、風呂なし、共同便所のアパート。その名を「トキワ荘」と言いました。何の変哲もないアパートが、若手漫画家の梁山泊となった背景も、学童社との関わりを抜きには語れません。なぜなら、学童社の編集者が、手塚治虫を、いわゆる“カンヅメ”状態で漫画を描かせるために、トキワ荘に住ませたからなのです。次いで寺田ヒロオが、そしてまた、手塚を慕って藤子不二雄や、石森章太郎、赤塚不二夫などもこぞって暮らすようになっていったのです。※3

漫画・まんが・MANGA

わずかに四半世紀前までは、低俗なもの、悪しき文化の代名詞でもあった漫画。漫画文化が、卑賤なものとして扱われていた時代に、その魅力や素晴らしさを説き続けていた人々の努力には、賞賛に値するものがあります。

現在では、「MANGA」や「OTAKU」が国際語で使われると同時に、JAPANIMATIONが、優良な輸出コンテンツとして評価され、国の省庁や都道府県、地方自治体などにおいて、積極的に推進すべき施策の一つとして位置付けられるまでになっています。※4

“有害図書”のレッテルを貼られていた時代と比べると、隔世の感がありますが、一方で、手の平を返したかのような評価の逆転に対して、これを手離しで喜ぶべきではない、といった警鐘も、漫画家自身から鳴らされていることも決して忘れてはならないのです。※5

漫画文化は爛熟期を迎え、数百万部を売り上げる雑誌もあれば、“3号雑誌”と揶揄されるものまで、百花繚乱、玉石混交の状況にあると言っても過言ではありません。そんな時代だからこそ、まんが文化の草創期を支えた人々の軌跡を振り返り、顕彰してゆく必要があるのです。

平成21年度秋の特別展では、『文の京のトキワ荘外伝—名編集長・加藤謙一の軌跡—』（仮称）と題して、『漫画少年』誌を中心とした出版文化に関わる展覧会を開催します。

どうぞ、ご期待下さい。

（加藤 元信）
（文中、敬称略）

【註】

※1 加藤謙一 1968『少年倶楽部時代』講談社

※2 加藤丈夫 2002『漫画少年物語 編集者・加藤謙一伝』都市出版

清水勲 1989『漫画少年と赤本漫画』刀水書房

寺田ヒロオ編著 1981『漫画少年史』湘南出版社

※3 石ノ森章太郎 1986『トキワ荘の青春ばくちの漫画修行時代』講談社

蔵持重裕編集・解説 1986

『トキワ荘のヒーローたち—漫画にかけた青春—』豊島区立郷土資料館

手塚治虫ほか 1989『トキワ荘・青春物語』蝸牛社

藤子不二雄 1981『トキワ荘青春日記』光文社

※4 経済産業省文化情報関連事業課 2001

『メディアコンテンツ制作資金調達問題研究会報告』経済産業研究所
東京都商工指導所調査部編 1999

『情報メディア・コンテンツビジネスの事業化戦略』
日経BP社技術研究部 1999『アニメ・ビジネスが変わる』

” 2000『進化するアニメ・ビジネス』

※5 石ノ森章太郎 2002『絆—不肖の息子から不肖の息子へ』鳥影社

手塚治虫 1989

『講演会記録』『朝日ジャーナル臨時増刊 見る・読む・考える
手塚治虫の世界』朝日新聞社

20世紀前半、文京の園芸文化 —菊栽培と温室文化—

近年、東京23区の荒川・足立・豊島・板橋・練馬・葛飾などの博物館では、地域ブランドの野菜を採り上げるようになり、展示の一ジャンルとして確立した観があります。文京では幕末・明治の「駒込茄子」が知られていますが、館蔵資料が少ないため、「ぶんきょう食の文化展」(2008)で数点の資料を紹介したにとどまっています。当館では、「菊人形今昔」展(2002)において団子坂の植木屋による菊細工や菊人形の地域観光との深い関連性、「本草から植物学へ」展(2004)では近代植物学との連続性、「八犬伝で発見！」展(2006)では江戸時代の和風温室などを紹介しました。このように文京の地では、野菜園芸だけでなく、様々な形での園芸文化が発達してきました。以下では、こうした点を踏まえて、文京の園芸文化の特徴を、20世紀前半の資料から探っていきたいと思います。

1. 菊栽培と文京

明治時代に流行した花の筆頭は、菊といってよいでしょう。団子坂には数多くの植木屋が立ち並び、行楽客の眼を楽しませました。図1は、明治43年(1910)発行『菊之培養法』です。作者の大西精三郎は、団子坂で菊人形を手掛けた植木屋ですが、当時の菊花栽培について次のように語っています。



図1「菊之培養法」
(06-K-0050)

方今は我国より欧米の方が一層盛んな様子であります。故、本家本元たる我国は、逆輸入の菊に負けてはならぬと、菊の栽培家は、大に覚醒し、又素人間にも盛

に菊を作らねばならぬと、奮発する者益々多く、菊の栽培は愈々精妙の域に進む次第となつて来たのであります。

明治末期ともなると日本の園芸品種が輸出され、新たな園芸種が外国人によって作出されるようになります。これに触発され、日本でも江戸時代以上に、菊花の栽培に対して情熱を傾けるようになりました。



図2「山草盆栽并ニ水石陳列」
(浅井家資料：04-019-0277)

また、団子坂に大勢いた植木屋は、菊人形ばかり行っていたわけではありません。蔵石光三郎を主人とする薫風園が販売した山野草は、植物学者・牧野富太郎やボタニカル・アートの巨匠、五百城文哉に強く影響を

えています。薫風園は、菊人形が下火になった頃、山野草という新境地を切り開き、また華族・学者などを宣伝媒体にして成功しました。それを物語るのが、明治39年6月10日に開催された「山草盆栽并ニ水石陳列」(図2)という陳列会の広告文です。このような会の開催によって、知識階級を顧客にすることが可能になったのです。なお、本資料の旧蔵者である「植惣」こと浅井惣太郎もまた、菊人形で著名な植木屋ですが、盆栽植木屋「菊華園」としても営業していました。



図3(三ツ矢論右家資料：07-003-0102)

図3は、小石川区音羽町で酒屋を営んでいた三ツ矢家のこされた、大正から昭和に写されたと思われる写真です。形・大きさともに立派な厚物の菊鉢を段状に飾り、市松模様の障子の上屋を仕立てています。現在、湯島天満宮など寺社境内で開催されている菊花展と全く変わることはない花壇を、個人の庭でしつらえていたのは驚くばかりです。後述する大隈・酒井両伯爵邸でも菊花壇はしつらえてありましたが、庶民レベルにまで、菊花栽培が浸透していたことをよく物語っています。

2. 温室文化と文京

明治時代後半、日露戦争前後は、華族が競って洋館の建設を実施しました。今は失われた本郷の前田邸もその一つですが、日露戦争を挟んだため完成が遅れ、洋館に先んじて和館(日本館)が完成しました。この日本館完成のとき(明治38年12月9日)に前田家から団子坂植木屋・浅井惣太郎に宛てた葉書(浅井家資料：04-019-0261)によると、前田家の造園も手掛けたことがわかります。

洋館の建設は、諸外国と対等の力を顕示すべく、上流階級の人間が率先して行ったもので、その延長線上に、西洋温室を建てるという風潮があります。図4は、文京ゆかりの作家・村井弦斎が著した小説『食道楽 冬の巻』(明治36年刊)の口絵です。早稲田の大隈重信伯爵邸で催された晩餐会の模様が描かれています。大隈は、それまでの日本人が



図4『食道楽 冬の巻』(06-K-0001)

見たこともないアメリカや東南アジア産の洋蘭を並べた温室に貴顕紳士淑女を招き、接待空間として大いに活用しました。図5に示したのは、兵庫県立淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」で本年(2009)2月に行われたディナーショーの風景です。食事の後は、オペラや温室の歴史の話に耳を傾け、100年前に大隈が主宰した晩餐会をイメージし、現代の日本にはなくなってしまった社交空間としての温室を演出しました。



図5 奇跡の星の植物館 淡路夢舞台ラン展 2009



図6「酒井家植物園 庭園観覧券」
(01-0294)

意識していた証拠であり、同時代に華族や経済人の多くが温室を所有していたのも、西洋式的生活スタイルを真似たと考えられます。

大隈邸と酒井邸の温室で栽培された洋蘭は、大阪天王寺で開催された第5回内国勸業博覧会に出品されました。本博覧会は、明治時代に開催された内国勸業博覧会のうちで、最大規模であり、唯一20世紀に行われたものです。当時、展示会に出品できるほどの洋蘭の栽培者は、植物園や農事試験場を除けば、大隈伯と酒井伯以外はいなかったのです。

こうして明治後半期に華族によって世間に広められた温室は、大正時代になると庶民のものとなってきます。図7は、愛知県蒲郡市にあった旅館「常磐館」の絵葉書です。フランス風庭園に堂々たる温室が写っています。この常磐館は、文京ゆかりの著名な作家・菊池寛の小説、大正11年(1922)発表の「火華」(『菊池寛全集 第四巻』所収)でも舞台装置として冒頭に登場します。

…蒲郡の海!それは、瀬戸内海のやうに静かだ。低い山脈に囲まれ、その一角が僅に断れて、伊勢湾に続いて居る。風が立つても、白い波頭が騒ぐ丈で、岸を打つ怒濤は寄せては来ない。…この海岸の風光を独占するやうに、旅館常磐館が建つてゐる。…その丘陵には、梅林があり花園があり、小さいながら動物園がある。大弓あり楽焼の窯場がある。庭園には、姿の美しい小



図7「東海名勝蒲郡常磐館風景 丘上温室ノ一部」(個人蔵)

松が、生ひ茂り、青い芝生が生え続いて居り、海岸に近く放魚池さへ作られて居る。屋内には、玉突場があり、応接室にはピアノが備へられてゐる。



図8『菊池寛全集 第四巻』
(高崎屋旧蔵資料：T-1016)

…主従は、再び海の姿を賞め合つた後、梅林から直ぐ、それに続く花園の方へ行つた。花園の中央には、白亜の建物に硝子を張り詰めた温室が、立つてゐ、温室の中には、春浅い二月を、真赤な桜草やカーネーションが咲いてゐる。

常磐館が出来たのは明治45年ですが、大正時代、旅館経営者は、観光地として耐え得るべく、施設とその周囲を整備します。結果として観光客を誘う役目を担ったのが菊池寛の「火華」でした。本作品を機に、東京や関西からの蒲郡常磐館に足を運ぶ行楽客が増えていき、その目玉の一つに、カーネーションが並べられた温室があったのです。

大正12年の関東大震災は壊滅的な被害をもたらしましたが、その後の復興期には、新しい様式の建物が建設されました。そのモデルケースともなったのが、学校建築です。園芸文化として注目すべきは、緑豊かな復興小公園を隣地に連続させ、校舎の屋上・校庭などに花壇や温室を設置し、教育の現場に園芸の要素が強く見られるようになったことです。また、これまでになかった施設、温室を1箇所のみならず、数箇所に分けるところも少なくありませんでした。

菊花壇や温室は、建造物としては耐久性が強くありません。このため、以上述べてきた様々な文化は、現代では忘れ去られようとしています。しかしながら、こうした園芸文化がかつて文京の地にあったことと、現在の文京の景観とは無縁ではありません。例えば大学構内や住宅地の植栽の美しさなどの他に誇れる地域性を、将来も永く育てて欲しいと願います。

(平野 恵)

【参考文献】

- 木下直之「前田侯爵家の西洋館—天皇を迎える邸—」(『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合博物館)2000
- 辻本智子『奇跡の星の植物館からのメッセージ』グリーン情報 2007
- 平野恵「明治・大正期」(日本花普及センター『日本花き園芸産業史・20世紀』所収、2009刊行予定)

収蔵品展余話 「浪曲師テーブルかけ」を めぐって

はじめに

「浪曲師テーブルかけ」は、高さ約175cm、幅215cmもある幕状の布絵です。浪曲師が立つ舞台上のテーブルなどにかける布で、力士の化粧まわしのように、鼠履やファンから贈られることが多いのだそうです。先日、平成20年度収蔵品展で展示しましたが、壁ケースいっぱいに広がった迫力あるこの布絵をご記憶の方もいるかと思えます。

このテーブルかけは、平成3年(1991)に当館に寄贈されましたが、それまで展示の機会なく、地下収蔵庫に保管されていました。当時の記録が少なく、寄贈の経緯や資料の詳細は不明で、展示にあたり、改めて資料調査を行うことになりました。

手がかりは墨書「贈 木村重正師江 駒込吉祥寺 茗荷稲荷講 有志 晴雨」。この文字が実に多くのヒントを与えてくれたのでした。

茗荷稲荷講

茗荷稲荷は吉祥寺(本駒込3)の山門を入った左側にあります。縁起は表示板に記されていますが、詳細な情報を求めて吉祥寺近くにお住まいの井上明さんを訪ねました。井上さんは地元で詳しく、ふるさと歴史館でも長年お世話になっている方です。井上さんによると、茗荷稲荷は戦後、当時の住職の発願により建物が鳥越から移築されたこと、講(信仰者のグループ)は町内の商人のうち女性主体で10年程活動していたこと、商売繁盛を祈願し、初午の行事などを行っていたということでした。また吉祥寺近くで石材店を営まれる杉崎雨泉さんにもお目にかかり、戦前は本堂左側の大銀杏の下に小さな祠があり、痔の神様として秘かにお詣りする人があったこと、戦時中被災し、昭和26年(1951)、土台と祠が先に現在地に建てられ、「茗荷山大権現」の石塔、庚申塔も移され、その後町内(吉祥寺町、片町、浅嘉町)有志による奉賛会によって、昭和28年、玉垣が寄進されたということがわかりました。奉賛会の人々の名前は玉垣に刻まれているが、その位置は抽選で決めたそうです。杉崎さんはこの玉垣の制作をひとりで担当されたということでした。現在は、毎年4月の「花供養」の際、社前にて読経が行われています。

画家・伊藤晴雨

伊藤晴雨(1882-1961)は、明治42年(1909)頃から昭和36年(1951)の没年まで、駒込動坂町(現、千駄木5)に約50年住みました。縛り絵など際どい画風が有名ですが、文京の風景を描いた作品ものこしています(表紙



浪曲師テーブルかけ 館蔵
(部分、2枚のうち1枚)

参照)。また随筆『文京区絵物語』は、地元に住み、地域の人と交流し、その今昔をよく知った者にしか書き得ない、地元密着な情報が満載され、地域史を知るためにも興味深い1冊です。

テーブルかけは、茗荷稲荷講の人が、近所に住む伊藤晴雨に揮毫を依頼したと推察されます。描かれたのは「八百屋お七」で、物語の舞台は本郷、お七の墓は大円寺(白山1)にあり、吉祥寺にはお七と吉三郎の比翼塚が建てられ、文京にゆかり深いテーマです。しかも火あぶりの刑になるお七の物語は、いかにも伊藤晴雨好みの画題で、髪を振り乱し、着物の裾を翻して火の見櫓に駆け上がるお七の姿は、まさに本領発揮といったところですよ。

浪曲師・木村重正

開催前の調査で唯一わからなかったのは、浪曲師・木村重正の経歴でした。

しかし展覧会が始まった後、浪曲師の親戚にあたる酒井久二さんにお会いする幸運に恵まれました。当館ホームページに掲載されたテーブルかけの画像、「木村重正」の文字をご覧になっての来館でした。酒井さんからのお話とご教示頂いた文献によると、本名は早川四那治(読みはしなじ、あるいはしろうじ)、明治32年(1899)新潟県生まれ。14歳の秋、寿々木亭米造に入門し、米若という名で半年後初舞台。1年後小島亭小徳一門となって徳若と名乗り、17歳で独立して児島一馬と改名、各所の寄席に出演しました。18歳の時突然浪曲を語る声が出なくなり、松林右円に弟子入りして講談に転向しますが、1年で復帰。浪曲と講談両方で稼ぎ、大正13年(1924)24歳の時、三ノ輪の三遊倶楽部を買収、三遊演芸場と名づけて経営します。若くして才覚を現しましたが、不運にも日中戦争中の慰問で交通事故にあい、背中と頭を強打して目を患います。その後38歳で江戸川浪六、さらに昭和26年、三代目木村重正を襲名しました。レパートリー豊富で78歳頃まで現役を通しましたが、晩年は目が悪化し、平成元年に亡くなったということですよ。

戦後の住まいは駒込蓬萊町(現、向丘2)、つまり木村重正もまた地元の人だったのです。吉祥寺の豆まきに参加したり、地元での興行を取り仕切ったこともあったそうです。没後、テーブルかけは遺族によって地元に戻され、当時の町会長の手を経て、当館の所蔵品となったという経緯が明らかになりました。これで浪曲師に贈られたものがなぜ、地元・文京にのこされたのかという謎も解けました。

おわりに

以上のように、このテーブルかけは、地元ゆかりの人々が幾重にもかかわった、まさに地域資料中の地域資料であったことが再確認されました。また制作時期も、昭和20年代後半～30年代前半と推定することができました。

ひとつの資料をめぐって、地域の歴史や地域に生きてきたさまざまな人々がひとつに結ばれ、展覧会を開くことでまた新たな情報も舞い込んでくる、まさに地域に存在する博物館活動の神髄であり醍醐味でもあるところですよ。

(川口明代)

【参考文献】

『文京区絵物語』伊藤晴雨著 文京タイムス社 1952
『東西浪曲大名鑑』芝清之編 東京かわら版 1982

平成 20 年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「体験しよう 不思議な箱カメラ」

◆第1回 7月30日(水) 参加者数……19人

◆第2回 7月31日(木) 参加者数……16人



歴史教室

歴史講座

「歴史とエコロジーからよむ東京の都市空間」／陣内秀信氏（法政大学教授）

◆9月13日(土) 会場：文京区男女平等センター 参加者数……87人



歴史講座

特別展

「博物館で見る—ぶんきょう食の文化展—」

◆10月25日(土)～12月7日(日) (延べ38日間) 入館者数…3,273人

◆記念講演会

11月23日(日) 会場：文京区男女平等センター

「近世・近代における文京の食文化」／原田信男氏

(国士舘大学教授) 参加者数……47人

11月30日(日) 会場：文京区男女平等センター

「文京の遺跡出土の食文化—江戸と京の比較—」／北野信彦氏

(東京文化財研究所) 参加者数……55人

◆展示解説 11月13日(木)、11月27日(木)



特別展

収蔵品展

「蔵出し！文京ゆかりの絵画—逸品・珍品、勢ぞろい—」

◆2月14日(土)～3月22日(日) (延べ32日間) 入館者数…2,427人

◆展示解説 2月19日(木)、3月12日(木)



収蔵品展

ミニ企画

◆3月26日(水)～7月21日(火)「子どもの遊び 小さな世界」

◆7月24日(木)～10月13日(月)

「森鷗外とドイツ」(本郷図書館鷗外記念室企画・展示)

◆10月15日(水)～12月23日(火)「八犬伝にみる食の風景」

◆1月6日(火)～4月26日(日)「見え隠れする纏—天井裏の守護神伝—」



ミニ企画 見え隠れする纏

平成 20 年度のあゆみ

史跡めぐり

- ◆第1回 7月 1日(火) 伝通院と江戸の庶民信仰 参加者数…57人
- ◆第2回 11月 6日(木) 茗荷谷界隈を歩く 参加者数…53人
- ◆第3回 3月 27日(金) 春の小石川植物園を歩く！ 参加者数…44人



史跡めぐり

平成 21 年度の催し

ミニ企画

生活をささえた道具たち—新収蔵資料紹介—
4月29日(水)～8月中旬
その他のテーマにて、年度内に3企画を展示します。

小・中学生のための歴史教室

歴史館でクロスワードに挑戦 わがはい君探偵団！
7月22日(水)～8月30日(日)
歴史館の展示を見学して、クロスワードパズルに答えてみよう。

特別展

文の京のトキワ荘外伝—名編集者・加藤謙一の軌跡—(仮)
10月24日(土)～12月6日(日)
昔なつかしの「少年倶楽部」や、伝説の「漫画少年」など、出版文化に関わる展示をします。

史跡めぐり

歴史館友の会文京まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。
年3回(7月、11月、3月)開催予定。要申込(往復はがきにて)。
参加費40円。

歴史講座

明治のベストセラー『食道楽』の著者—村井弦齋—(仮)
9月5日(土)
講師は黒岩比佐子氏(ノンフィクション作家)です。要申込(往復葉書にて)。定員60人(超えた場合は抽選)。参加費200円。

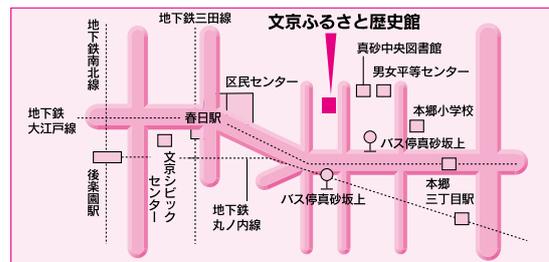
収蔵品展

平成22年2月13日(土)～3月22日(月)(予定)
収蔵資料を中心に企画展示します。

※事業内容の詳細は「区報ぶんきょう」および歴史館ホームページにてお知らせします。

利用の案内

- ◆開館時間：午前10時から午後5時まで
- ◆休館日：月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料：一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
*特別展は別に定めます
- ◆交通：地下鉄/丸ノ内線・大江戸線本郷三丁目駅、または三田線・大江戸線春日駅から徒歩5分
バス/都02上69真砂坂上から徒歩1分
- ◆ホームページ：<http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>



文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221